

夢湧き、夢に夢中

確かな年輪を重ねたい



校庭に悠然とたたずんでいたメタセコイアが、安全性確保を理由に伐採された。ここ数年、太い枝が落枝することがあったためだ。校舎から見える雄姿が見られなくなり、一抹のさみしさを覚える。

「秋になると、全部の葉っぱが黄葉して、とても見事なんです」長年、本校に勤務されている先生から伺った。「写真を撮りに来る人もいるくらいです」そう言葉を続けながら、笑顔がこぼれる。「でも、もう今年は来られないでしょうね」四月に赴任したわたしにとって、南阿蘇中で過ごす初めての秋だったのだが、色鮮やかなその姿を目にするのができなかつたことは、名残惜しくてたまらない。

伐採された後、その跡を見に行った。新鮮な木材の香りが辺りに漂い、心が落ち着く。しかし、そこにあったはずの巨木たちはなく、あるのは切り株たちだけ。さみしさが一層増す。



「そう言えば、幼いとき切り株を見ては年輪を数えて、その木の年齢当てを友達としたな」切り株をのぞき込んだとき、そんな思い出がふと蘇り、思わず手にしていたスマートフォンのカメラを向けた。随分と久しぶりだったせいか、何だかとても懐かしい気持ちになって感慨深くなった。自然の力は神秘的で不思議なものだ。

どの切り株も年輪が鮮明ではなく、数えるのが難しかったが、ある木の断面には五十三本の年輪を数えることができた。昔どこかで習った



記憶からすると、どうやらこの木はおおよそわたしと同じ年齢ということになる。何という出会いか。ますます感慨深くなる。

「一、二、三、四、五、六……」中心から一本ずつ数えてみる。そして、次は外側から。すると、あることに気づく。年輪の間隔は所々広くなったり、狭くなったりしているが、この木の断面を見る限り中心ほど広く、外側に行けば行くほど狭くなっていた。そこで、さっそく調べた。木は春から初夏にかけて成長し、やわらかくて白い木部を作るが、夏以降は硬くて色の濃い木部を作るそう。年輪は内側(中心)ほど古く、外側が新しいものだ。つまり、木は若いときほど白くてやわらかい木部を分厚くさせながら著しく成長しているが、年を重ねるごとに成長そのものは一見緩やかに見える一方、実は幹回りを太く確かなものにしながらか成長してきたのだろうと考えた。

中学生年代である生徒の皆さんは、心身ともに成長が著しいときであり、今まさに年輪の中心にいる。特に日頃の生活の中で自分が感じたことや考えたことはもとより、悩んだことや苦しんだこと、そして成功したことばかりではなく時には失敗したことさえ心の栄養分となって自分の心を強く太くしていくのである。そして、これを中心として、さらに年輪を重ねながら太い幹となり、やがて大きく枝を広げ葉を茂らせた大木となつて人生をより豊かにするのである。その対局にいるわたしからすれば、とても羨ましい限りだ。しかし、人生百年時代である。わたしも本校の歴史を見守ってくれたメタセコイアのように、皆さんともにもっともつと確かな年輪を重ねたい。

■先日のPTA除草作業では、南阿蘇西小校区の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。今後は職場体験(2年生)や福祉講話(3年生)及び農業体験(1年生)など、地域や保護者の皆様にご指導いただく機会が多々ございますので、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。